

# 文化的景観から見た祇園橋周辺河川整備に対する考察

Cultural Landscape Study on River Improvement surrounding Gion Bridge

高木 雄基  
Yuki TAKAGI

本研究では、祇園橋周辺河川整備における「文化財保護」の必要性に対して「文化的景観」という視点をを用いることで、祇園橋を取り巻く場というものを考える。そのためには、文化財単体ではなく広い視野で見ることが必要である。そこで、「空間の履歴」と「使われ方」の2つの視点に基づいて、分析をおこなう。このことより、場の持つ意味を理解することで、祇園橋周辺の文化的景観を明らかにし、現在の整備計画に対して考察を行う。

*Key Words: cultural landscape, conservation of heritage, festival, gion bridge*

## 1. はじめに

祇園橋は、熊本県天草市（旧本渡市）の町山口川下流部に位置し、平成9年に国指定重要文化財に指定された橋である。現在、祇園橋周辺では河川整備が計画されており、「治水」と「文化財保護」を軸とした整備方針が示されている（図-1）。

ただし、現在の整備計画では「治水」については十分に満たされているといえるが、「文化財保護」について十分だとはいえない。

現計画における「文化財保護」の考え方は、文化財を物単体としてのみ捉えている。しかし、祇園橋は文化財である以前に社会基盤施設であるため、架橋当時から現在まで、川の両岸を繋ぐ橋として、周辺に暮らす人々に利用され続けている。つまり、祇園橋は長い年月を経て、自然と人々の暮らしの中に存在している文化財であり、文化財単体で存在しているのではない。そこで、文化財を物単体として捉えるのではなく、時間的にも、空間的にも広い視野で見ていくことが必要となる。この手掛かりとなる視点として、文化的景観という考え方をを用いる。文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」<sup>1)</sup>と定義されている。この視点をを用いることで、「文化財保護」という側面に対して、何らかの提言が可能であると考えられる。

本研究では、祇園橋周辺における文化的景観の整理や解釈を行い、「文化財保護」という側面が考慮された整備計画に関する考察を行うことを目的とする。

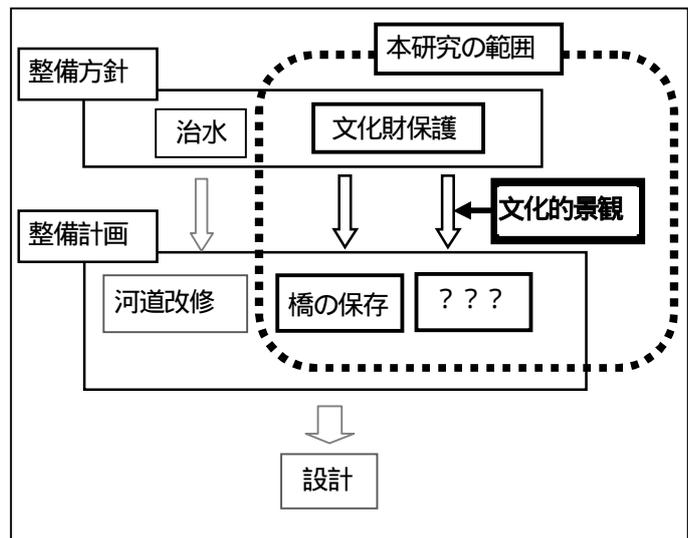


図 - 1 研究の位置付け

## 2. 研究対象

### 2.1 本渡市の概要

熊本県本渡市は、天草諸島の中央部に位置する面積約145km<sup>2</sup>、総人口約4万人の市である<sup>2)</sup>(図-2)。周囲を海に囲まれた天草地方の行政、経済、交通の中心地である。地形のほとんどが山林で占められ、急峻で平野部は少なく、河川沿いの平地部や海岸線の河口部に市街地や農地が展開している。2006年には本渡市を含む2市8町が合併し、総面積約683km<sup>2</sup>、総人口約9万3千人の天草市が誕生した<sup>4)</sup>。

本渡市の中心部を流れる町山口川は沿川にアーケード街があり、中心部を流れた後、本渡港へと注いでいる(図-3)。また、町山口川周辺は、1637年に起こった天草・島原の乱の激戦地である。この乱で亡くなった霊を弔うため、本渡城跡



図-2 本渡市の位置

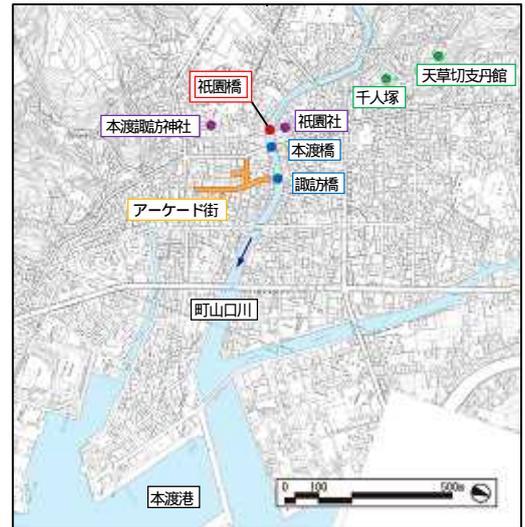


図-3 本渡市街地図<sup>3)</sup>(筆者一部加筆・修正)

には、殉教戦千人塚が建立され、天草切支丹館と共に、天草のキリシタンの歴史を今に伝えている。祇園橋の周辺には、八坂神社(以下、祇園社と記す)のほか、天草の宗社である本渡諏訪神社がある。

### 2.2 祇園橋の概要

祇園橋は、橋長28.6m、幅3.3mの石造桁橋で、45本の角柱の橋脚によって支えられている。基礎の岩盤を削らず、自然の起伏に合わせて橋脚の長さを違えるなど、江戸時代の石工の工夫が見られる<sup>5)</sup>。材料は地元で採れる砂岩質の下浦石を使用し、江戸時代以前の石造桁橋としては現存最大である。

祇園橋が架橋されたのは江戸時代後期のことである。江戸時代、祇園橋周辺は町山口村と呼ばれていた。当時の町山口川には、現在の本渡橋と諏訪橋の間に土橋が架橋されていた。土橋とは、木で組んだ橋の表面に土を被せた橋のことである。町山口川に架橋されていた土橋は、梅雨や台風時の洪水により度々流出した。そのため、流失しない丈夫な橋の建設が望まれ、町山口川下流域で、祇園社の前にのみ広がる岩盤に目を付けられる。その岩盤を基礎に、発起人である町山口村の庄屋と、3人の世話人を中心とした全村の寄付によって<sup>6)</sup>、天保3年(1832年)に石橋が架橋された。架橋当時は、祇園橋架橋記念碑に彫られているように、石橋と呼ばれていたものが、その後、祇園社の前にあることから祇園橋と呼ばれるようになった(写真-1)。祇園橋は、町山口村の南北を結ぶ生活道として、また、天草の村々を結ぶ往還(街道)や祇園社への参道として利用されていた。

現在、祇園橋は日々の生活道や祇園社への参道として、また、本渡市で行われる3つの祭の舞台として利用されている。祇園橋は、平成4年に創立された「本渡祇園橋と町山口川周辺の環境を守る会」の活動もあり<sup>7)</sup>、平成9年に国指定重要文化財に指定された。一方で、祇園橋は、町山口川の感潮区間に位置するため、潮の満ち引きによって水位が変化する。そのため、梅雨や台風による大雨と大潮とが重なると、洪水氾濫が発生する危険性が問題視されている。



写真-1 祇園橋と岩盤

## 3. 整備計画と課題

### 3.1 整備計画概要<sup>8)</sup>

増水時に上流から流されてきた流草木が祇園橋の桁に堆積し、水を堰き止めてしまう。そのため、整備区間の中において、祇園橋が流下能力を阻害する最大要因となっており、祇園橋の流出の危険がある。また、祇園橋は架橋当時から現在まで祇園社への参道として用いられている。

そのため、祇園橋周辺河川整備では、洪水を防ぐことと、国指定重要文化財である祇園橋と、祇園社と祇園橋の一体となった景観を守るということから、「治水」と「文化財保護」の2つを軸とした整備方針が示されている。具体的には、祇園橋上流に水制工を設け、流路を変更することで祇園橋を水圧から守り、現地保存し、拡幅と河床掘削、築堤により流下能力不足を補う計画となっている(図-4)。そして、変更、拡幅された流路に新設橋梁を架橋し、水制工の上を親水公園にする計画となっている。

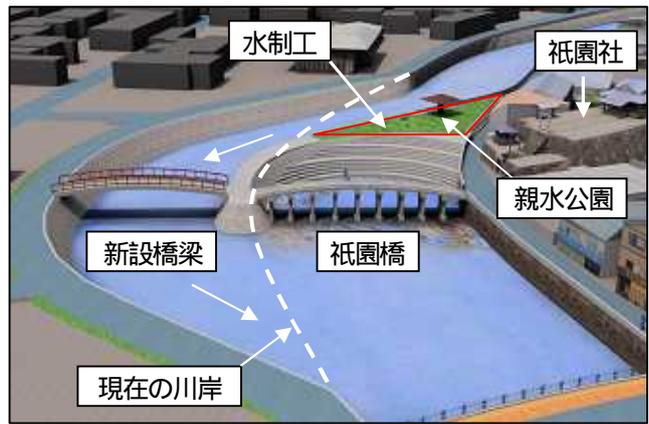


図-4 現在の整備計画(一部加筆・修正)<sup>9)</sup>

### 3.2 整備計画の課題

整備計画では、流路を変更し、祇園橋の下に水を流さない構造にすることで、祇園橋が流失する危険はなく、現地保存が可能となり、治水の側面も達成されている。

しかし、今ある祇園橋の風景を成り立たせているものは、祇園橋と祇園社だけではない。岩盤という丈夫な基礎があることで、祇園橋は架橋することができたのである。その結果、176年間、祇園橋は川の中で度重なる洪水にも耐えてきた。また、普段は水量も少なく、干潮時には、岩盤の凹凸に合わせて水が流れており穏やかな表情を見せている。このように、祇園橋の風景は、祇園橋と祇園社だけでなく、祇園橋を支える基礎としての岩盤や、橋の下を流れる水が一体となって一つの風景を作り上げており、どれも切り離すことのできない密接な関係にあるのである。現在の整備計画では、水制工があるため、橋の下を水が流れず、密接な関係が切り離されてしまっている。

このことから、現在の整備計画では、整備方針である「文化財保護」の側面がうまく吸い上げられていないと考える。そのため、祇園橋単体のみを考えるのではなく、広い視野で見えていくことが必要ではないかと考える。

## 4. 分析

本章では、2つの視点に基づいて祇園橋周辺の文化的景観について分析・考察を行う。4.1節では、祇園橋のある本渡市の歴史の変遷や祇園橋周辺の交通の変遷など、祇園橋を取り巻く「空間の履歴」を明らかにする。4.2節では、祇園橋が用いられる3つの祭の舞台としての祇園橋や、祭の影響を受けた日常の中の祇園橋といった、祇園橋の現在の「使われ方」を明らかにする。4.3節では、2つの視点を基に、祇園橋周辺の文化的景観について明らかにする。

### 4.1 空間の履歴

#### 4.1.1 本渡市の変遷

##### (1) 天草・島原の乱

天草・島原の乱当時の古地図を見てみると、海岸の往還沿いにまちが発展していることが分かる(図-5)。

乱当時の町山口川には石垣が設けられ、「船橋」という土橋が架橋されていたが、町山口川を挟んで行われた天草・島原の乱の激戦の際、この土橋が切り落とされたという歴史がある。船橋という名前から、土橋が架橋される以前には船を並べた橋が用いられていたのではないかとされている<sup>11)</sup>。

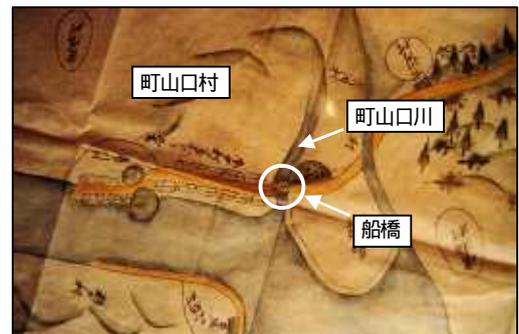


図-5 天草・島原の乱当時の町山口村<sup>10)</sup>

(一部加筆・修正)

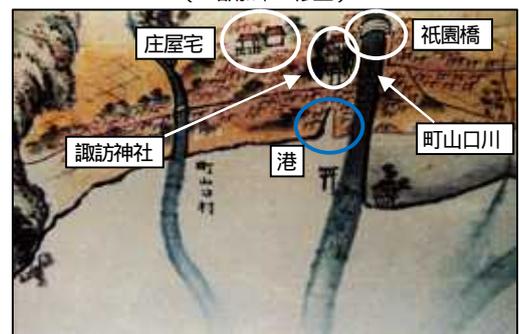


図-6 幕末期の町山口村<sup>12)</sup>

(一部加筆・修正)

## (2) 幕末期

町山口川を挟んで南北にまちが発達していることが分かる。古地図には庄屋宅と諏訪神社、祇園橋が描かれていることから、これら3つは当時の町山口村において重要であったことが窺える（前頁図-6）。また、祇園社が描かれていないことから、祇園社への参道としての役目よりも、村を結ぶ往還としての役目の方が重要であったことが分かる。

また、天草では人口増加に伴う農地や食料不足を解決するため、江戸時代後期から明治にかけて大規模な干拓が行われてきた<sup>13)</sup>。乱当時代と比べ、港が形成されるなど、干拓が行われていることが確認できる。

この港を利用し、町山口村では、江戸時代に近国と回船が行われていた<sup>14)</sup>。祇園橋左岸は船之尾と呼ばれており、船との結びつきが強いところであったと考えられる。

## (3) 明治期

明治に入ると、明治維新により天草は一度、長崎県の管轄になるが、後に熊本県の管轄となる。それに伴い明治6年に、県の出張所が江戸時代まで天草の中心であった富岡から、町山口村へと移る。明治31年には本渡町へと昇格し<sup>15)</sup>、天草の中心的なまちとして発展していく。

地図を見ると、町山口川では祇園橋に加え、県道の整備に伴い本渡橋が架橋されていることが分かる<sup>16)</sup>（図-7）。

天草・島原の乱当時の海岸線と比べると、江戸時代後期から行われてきた干拓が進み、干拓地は田として利用されていることが分かる。祇園橋はまちの外れに位置し、祇園橋周辺の町山口川沿いには建物があるが、その周辺は主に田として土地の利用がされている。

一方、海上交通は、明治中期にこれまでの帆船から、蒸気船へと変化し、船舶の大型化がみられる<sup>19)</sup>。

## (4) 大正・昭和初期

まちの通り沿いに多くの商店が並んでいる（図-8）。特に、諏訪神社が大正4年に旧庄屋宅に移転するまでであった通りが栄えており、現在のアーケード街の骨格が形成されている。祇園橋は地図から見てもまちの外れに位置している。昭和10年には、北に位置する本戸村を本渡町に編入した<sup>21)</sup>。

町山口川には井手が設けられており、そこから田に水を引いていた。また、町山口川の橋がない場所には飛び石が設けられており、干潮時のみ渡ることができた。そして、祇園橋の橋脚の辺りは、洗濯場として利用されていた。

航路を見てみると、本渡から三角行きと、島原の茂木行きの航路がある。本渡の港は遠浅のため干潮時には汽船が入港できない。そのため、汽船から舢舨（はしけ）という小舟を中継した後、港までの約2キロの砂浜を人力車で結んでいた。大正13年に、汽船乗り場は、本渡の北東に位置する本戸村の大矢崎港に移転した。そして、大矢崎港は、昭和3年に防波堤と浮棧橋が完成し、汽船が横付けできるようになったため、本渡港の機能のほとんどが大矢崎港に移転することとなる<sup>22)</sup>。

## (5) 戦後

昭和10年に合併した日本戸村の土地と、山側の以前田であった土地にまでまちが拡大しており、祇園橋周辺にもまちが発達し始めている（図-9）。

当時の町山口川では、祇園橋上流の水深が深くなっているところで、子どもたちが泳ぎ、エビを採って遊んでいた<sup>24)</sup>。

昭和3年に港の機能のほとんどが大矢崎港に移ったため、本渡港では、干潮時でも船が入港できるように、昭和12年から本渡港修築工事が行われていた<sup>25)</sup>。しかし、工事の途中で戦争が始まったため、一時工事が中断していたが、終戦後の昭和23年に再開された。

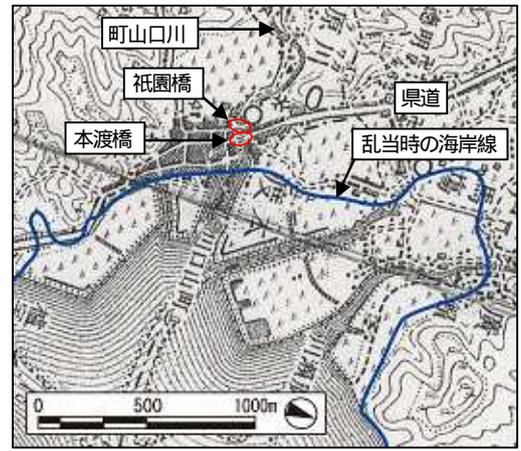


図-7 明治34年の本渡町<sup>17)18)</sup>

(一部加筆・修正)

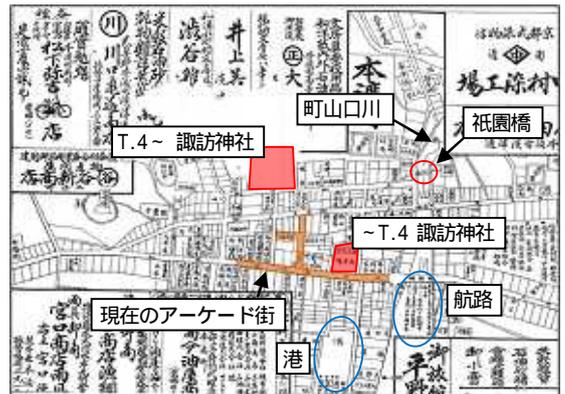


図-8 大正6年の本渡町<sup>20)</sup>

(一部加筆・修正)



図-9 昭和23年の本渡町<sup>23)</sup>

(一部加筆・修正)

## (6) 昭和後期

昭和29年に本渡町と周辺の7つの村が合併し、新しく本渡市が誕生した。まちも拡大し、祇園橋周辺も農地からまちへと変化していることが分かる(図-10)。昭和31年には、本渡市内にある天草・島原の乱の千人塚をまとめて、本渡城跡に新しく殉教戦千人塚を建立、キリシタン墓地などを整備し、殉教公園とした。昭和41年に天草五橋が完成し、熊本と天草が道路で結ばれた。それにより天草への観光客は増加し、本渡市でも開通に合わせ、昭和41年に観光施設である天草切支丹館が建設された<sup>27)</sup>。

昭和30年代に農薬が広く使われ始めたことにより、町山口川の水は汚れていった。その後、昭和48年から町山口川の改修工事により、河床の掘削や護岸整備が行われている<sup>28)</sup>。護岸はコンクリートが多く、コンクリートと石積み、工事の年代によって統一されていないため、現在では、護岸がちくはぐな状態となっている。

本渡市が誕生した昭和29年に、本渡港修築工事が完成し、潮の干満に関係なく船が入港できるようになり、本渡港は再び海上交通の要衝となった。しかし、その後の天草五橋の開通と自動車の普及により、港の機能は再び縮小していく。

## (7) 現在

平成20年に天草の2市8町が合併し、新たに天草市が誕生した。本渡は天草市の中心であり、現在も天草の経済、産業、交通の中心となっている。まちが拡大し、以前は田畑であった干拓地にも住宅や工場が建ち、中心地においても田畑は見られなくなっている(図-11)。山を切り開いて宅地が造成されていることも確認できる。

さらに、町山口川の下流部において、祇園橋周辺を除いて改修工事は終了した。

これまで、港の機能は縮小され、フェリーも次々に廃止されていたが、平成10年に本渡港に新しく栈橋を新設、フェリーターミナルが建設されると、本渡港と熊本港を約1時間で結ぶ超高速船が就航した。現在も、以前に比べると規模は縮小されたが、本渡の海の玄関としての役割を担っている<sup>30)</sup>。

本渡市におけるまちの変遷を見てみると、街道沿い発達したまちと、その周辺に広がる田の農村風景から、現在ではまちが拡大し、天草の中心部へと変化していることが分かる。祇園橋が架橋された当時、祇園橋はまちの外れに位置し、周辺には田が広がっていたが、まちの拡大により祇園橋はまちの中に取り込まれていったと考えられる。

町山口川は、昔は田へ引く水や、子どもの遊び場、洗濯などの生活の場として使われていた。しかし、その後のまちの発達に伴い、護岸はコンクリートで固められ、川で遊ぶ子供や、生活の場としては用いられなくなった。

さらに、海岸線と港の変遷を見てみると、祇園橋が架橋された当時、祇園橋から海までの距離は約200mと近かったものが、度重なる干拓により、現在では、海まで1km以上遠くなってしまっている。さらに、祇園橋が位置する船之尾という地名や、本渡橋と諏訪橋の間に船橋という土橋あったことからすると、以前は、町山口川まで船が上ってきていたのではないかと考えられる。

### 4.1.2 祇園橋周辺における交通の変遷

江戸時代の祇園橋架橋以前、往還は町山口村の中心に入ると、2つの経路( )に分かれていた(次頁図-12)。村の代表であり、当時の行政的な役割を担っていた庄屋宅の前を通る経路と、諏訪神社とその周りに発達したまちを通る経路の2つに分かれていた<sup>31)</sup>。町山口川まで至ると往還は再び合流し、町山口川沿いを上って行く下津・深江方面と、橋を渡ったところにある、天草・島原の乱の後に祀られた旧千人塚の側を通り、富岡方面、鬼池方面に分かれた。

祇園橋建設以降、本渡橋と諏訪橋の間の船橋はなくなり、祇園橋が天草の村々を結ぶ往還( )として、また、村の南北を結ぶ役割を担っていた。

江戸時代、天草は海上交通に恵まれていたため、道路は人が歩くことによって自然にできた道であり、明治に入るまで、本格的な道路整備は行われてこなかった。

明治時代に入ると、熊本県の施策として、県道開削が進められた。本渡町ではまず、明治34年(1902年)頃に、



図-10 昭和43年の本渡市<sup>26)</sup>  
(一部加筆・修正)

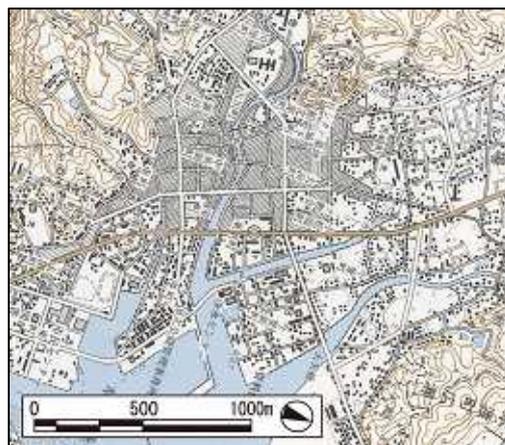


図-11 平成12年の本渡市町<sup>29)</sup>  
(一部加筆・修正)



図 - 12 橋と交通の変遷<sup>32)33)</sup>(一部加筆・修正)

富岡行き往還の県道整備( )に伴い本渡橋(土橋)が架橋され、その後、明治37(1904年)年頃に諏訪橋(土橋)が架橋された<sup>34)</sup>。本格的に道路が整備されたことによって、馬車や人力車が導入され交通の手段として用いられるようになる。

大正時代に入り、自動車が走り始めると、大正11年(1922年)に本渡橋は、土橋よりもより強度の強いコンクリート橋に架け変えられた。大正12年(1923年)に、下津・深江行きの県道( )が整備されることにより、祇園橋の前を通る往還は機能を失った。

昭和に入ると、まちの発達と乗合自動車の路線が増加するに伴い<sup>35)</sup>、昭和6年(1931年)に新しく昭和橋が架橋され、昭和通り( )が開通した。その後、昭和11年(1936年)に祇園橋の上流に睦橋(土橋)が建設された。

これらのことから、祇園橋が往還として利用されるようになってから約70年間、祇園橋は洪水でも流されることのない丈夫な橋として、村の住民や往還を利用する天草の人々にとって必要不可欠な存在であったといえる。しかし、その後の道路整備による馬車や自動車などの、徒歩に代わる交通手段の普及に伴い、他の橋が架橋されると、祇園橋は交通の要衝としての機能を失っていった。

すなはち、祇園橋を取り巻く「空間の履歴」とは、まちの発展に伴う農村景観から都市景観への移り変わりである。その移り変わりの中で、まちと海、町山口川、祇園橋はそれぞれ、密接な関係にあったものが、まちの発展に伴い、関係が薄れていったのである。

## 4.2 使われ方

### (1) 祇園祭(八坂神社の祭り)

祇園祭は祇園社周辺の5地区の氏子によって受け継がれ、毎年7月の第3土、日曜日に無病息災、悪疫退散、五穀豊穡を祈って行われる祭である。土曜日に前夜祭が行われ、日曜日に祇園社で神事を行った後、獅子舞があり、その後、猿田彦を先頭に笛や太鼓の調子に合わせて、大行列の道中姿のはさみ箱、立笠、台笠、烏毛、神輿、子ども樽みこしなどの神幸行列が行われる。祇園社は本渡市の中心街の氏神様であることから、まちの中心部において神幸行列が行われる<sup>36)</sup>。

神幸行列の順路は、祇園社を出発した後、氏子の住む5つの地区を中心にまちを回る途中、招魂場、本渡諏訪神社、古川公園、川原天満宮にお休み所が設けられており、各所で神事が行われ、最後に祇園橋を渡り祇園社へと帰る(次頁図-13)。また、招魂場、本渡諏訪神社、古川公園、アーケード街では獅子舞が奉納される。

次に、祇園橋周辺での神幸行列と、それを眺める観客について詳しく見る。神幸行列はまちを回った後、町山口川上流右岸沿いを祇園社の方へと下ってくる。それに合わせて、祇園社の前では、子どもたちが太鼓や笛を奏す。神幸行列の先頭の氏子が祇園橋を途中まで渡ったところで、進行方向を向いたまま、今歩いてきた道を後ろへと戻り始めるのである。それに合わせて、後ろの氏子達も後ろへと戻り、ある程度戻ったところで、再び前へと進み先頭の氏子が祇園橋を渡る途中で再び、後ろへと戻る。その後、戻る距離を徐々に短くしていき最後に橋を渡り祇園社の鳥居をくぐるのである(次頁写真-2)。神幸行列が睦橋に到達してから、神輿が祇園社へと帰るまでに、約1時間かかる<sup>37)</sup>。

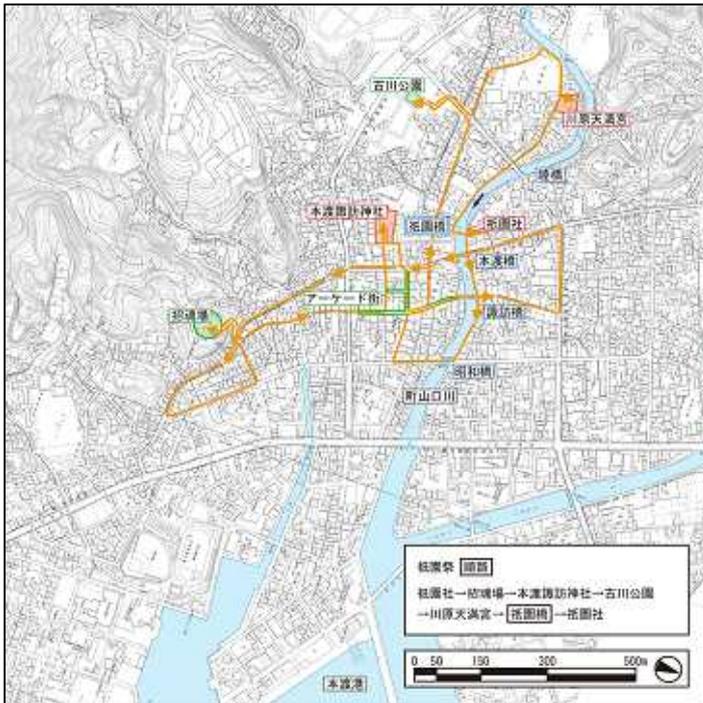


図 - 13 祇園祭の順路<sup>38)</sup> (一部加筆・修正)



図 - 14 祇園祭における祇園橋<sup>39)</sup>  
(一部加筆・修正)

次に、祇園橋周辺における神幸行列の氏子と、それを眺める観客の視点場について見る(図 - 14)。観客の視点場は主に2つである。まず1つ目は、祇園橋上流右岸側のT字路のところから眺めている人が多い(図中、A)。ここは、祇園社の前で子どもたちが奏する笛や太鼓の音に合わせて、目の前を神幸行列が通り、祇園橋を渡り、祇園社の鳥居をくぐる一連の動きを同時に見ることができる視点場



写真 - 2 祇園橋を渡る神幸行



写真 - 3 神幸行列と観客

である。2つ目は、祇園橋下流左岸橋詰のところから神幸行列を眺めている人が多い(図中、B)(写真 - 3)。ここからは、祇園橋を渡る行列を正面から見ることができる。さらに、まち中を練り歩いてきた氏子達が、最後に祇園橋を渡る時の表情もよく見ることができる視点場である。氏子の視点場としては、祇園橋上流右岸から、祇園橋を渡る神幸行列を見る視点場がある(図中、C)。

このように、祇園橋は祇園祭において、まちを回った後、祇園社へと帰るための参道としての役割を担っており、祇園祭における最大の見せ場である。

## (2) 本渡諏訪神社の祭

本渡諏訪神社の祭は11月の1日から7日間、平安鎮護、息災・繁栄を願って行われる祭である。この大祭に合わせ「本渡の市」が開かれている。「本渡の市」は宝暦9年(1759年)に諏訪神社が山の口より、まちに神体を遷座し、大祭に「農具市」が行われたことに始まる。当時、天草島内に商店は少なく、「農具市」が次第に「雑貨市」へと広がり、農具だけでなく、1年間の生活必需品の一切を買い求める「本渡の市」に発展し、多くの人で賑わっていた。現在は往来の賑わいはないものの、茶碗や日用雑貨などの露店が立ち並び、境内外には菊花展や植木市が催され、市内各所では協賛のスポーツ大会、文化祭などの行事が行われる。11月1日と2日に、本渡諏訪神社創建当時の鎮座地である山の口まで、各地区に分かれた子ども樽みこしを先頭に、天草太鼓、婦人手踊り、花笠稚児、神輿の神幸行列が行われる。本渡諏訪神社は現在、天草の宗社となっているが、以前は本渡市の中心部である、旧町山口村の村社であった。そのため、旧町山口村全体で神幸行列が行われる<sup>40)</sup>。

神幸行列の順路は、1日に本渡諏訪神社において献花式が行われた後、神幸行列(お下り)が行われる。神幸行列は、本渡諏訪神社を出発した後、山の口公民館へと向かう途中に、祇園社と祇園橋、中山口公民館、農協山口出張所の3ヶ所に御旅所が設けられており、各御旅所において神事が行われた後、子どもたちが諏訪太鼓を奏す。神幸行列は、まちの中心部を抜けたのち、山の口公民館まで町山口川に沿って神幸行列が行われていく。2日目は山の口公民館を出







写真-6 本渡橋から上流を見た風景<sup>49)</sup> :

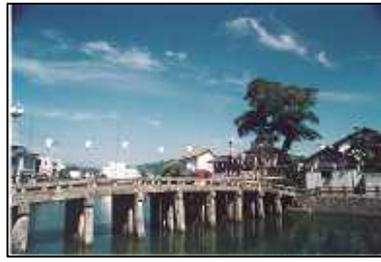


写真-7 祇園橋下流右岸から見た風景<sup>50)</sup> :



写真-8 祇園橋上流右岸から見た風景<sup>51)</sup> :

### 4.3 祇園橋周辺の文化的景観

4.1節の「空間の履歴」と4.2節の「使われ方」を合わせた分析を行う(図-20)。まず、祇園祭において、祭の目的の一つに五穀豊穡とあることや、現在はまちである場所も以前は田であり、町山口川の水を引いて稲を育てていたことから、町山口川とまちに生活する人々は密接な関係にあったと考えられる。また、町山口川は恵みをもたらす反面、洪水氾濫により大きな被害を引き起こしていた。このことから、昔の人々にとって、祇園祭の際に時間をかけて町山口川に架かる祇園橋を渡るということは、町山口川に対して、氾濫することなく、五穀豊穡の恵みを与えてくれますようにという祈りが込められ、重要な意味を持っていたのではないかと考えられる。また、祇園祭の際に神幸行列が行われる範囲と、昭和中期のまちの範囲が一致しており、祭の順路が過去の往還や主要道路の上に位置していることから、祇園祭は昭和中期末までの履歴の上に位置づけられることが分かる。

本渡諏訪神社の祭においても、祇園祭と同じく、祇園橋の上で太鼓を奏すなど祈りを捧げていることから、町山口川に架かる祇園橋は、重要な意味を持っていたと考えられる。本渡諏訪神社の祭の際に行われる神幸行列は、まち全体で行われ、海の神様である金刀比羅神社にも立ち寄ることから、まちと町山口川だけでなく、海も重要であり、祭と現在のまちの範囲が一致することから、現在までの履歴の上に位置づけられる。

天草殉教祭においては、天草・島原の乱当時、祇園橋はまだ架橋されておらず、祇園橋と乱は直接関係ない。祇園橋は、天草・島原の乱の激戦地である町山口川に架橋されていることから、祭の舞台として用いられているのであり、町山口川が重要な意味を持つのである。天草殉教祭においては、天草・島原の乱の慰霊祭であることから、天草・島原の乱当時の履歴のみの上に位置づけられる。

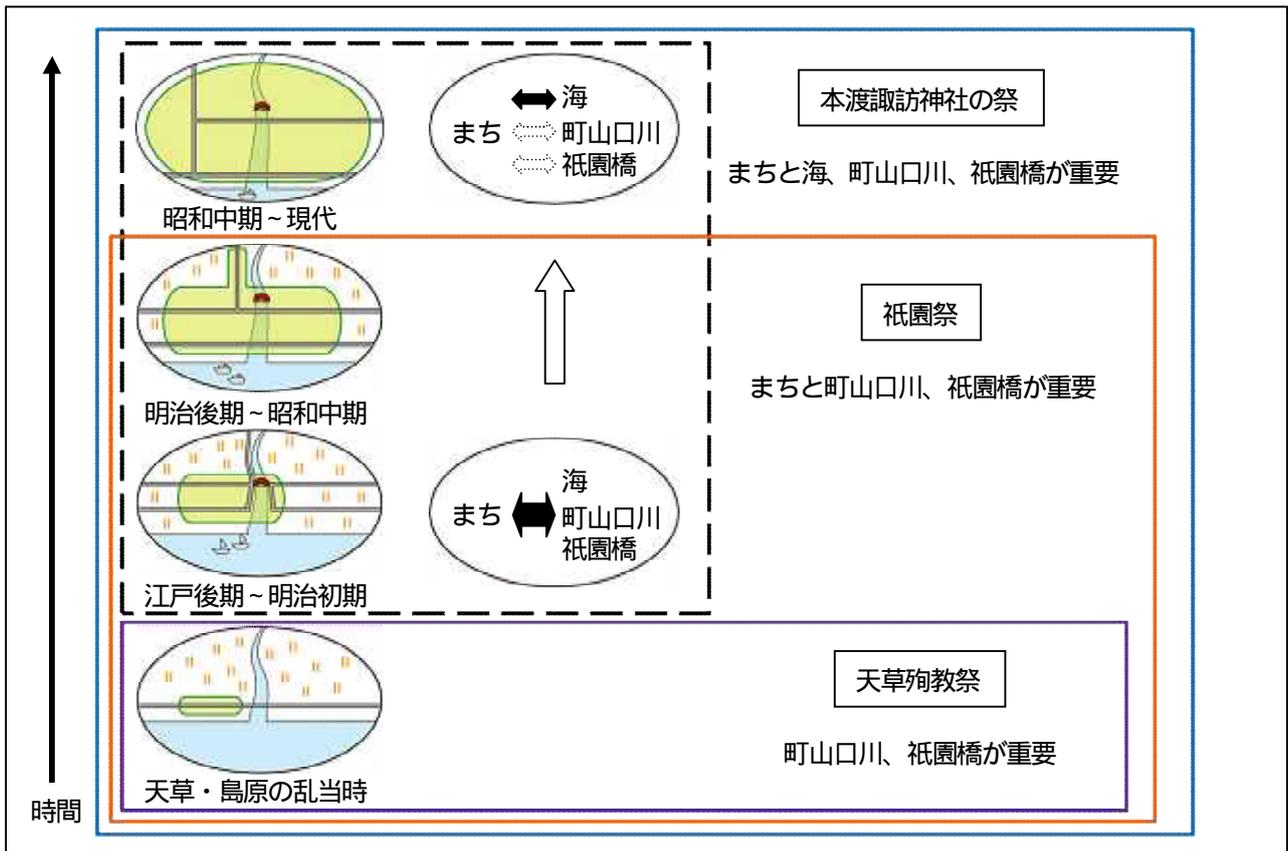


図-20 祇園橋周辺の「空間の履歴」と「使われ方」

これらのことから、祇園橋は3つの祭において意味は異なるが、重要な役割を持っていることがわかった。また、まちの発展に伴って現在の祭の動線が出来上がったことが分かる。まちの北側は、まちが発展しているにもかかわらず、祭の際に神幸行列の範囲に入っていない。これは、旧町山口村と本戸村の村境であったからであると考えられる。その後合併し、一つのまちとして形成されてはいるが、神幸行列の順路は旧町山口村内内だけであることが分かる。よって、3つの祭は、旧町山口村を中心とした空間の履歴の上に位置付けられることが分かった。

現在、まちは発展し、周囲には田もなくなり、交通や生活様式も変化したため、以前のように、まちと、海、町山口川、祇園橋の密接であった関係が希薄になっている。

以上のことから、「空間の履歴」の中にある、町山口川や海、祇園橋とまちの関係を、「使われ方」である祭の中に見ることができると考えられる。言い変えると、現在の普段の生活では見えなくなっている「空間の履歴」を年に1度、可視化しているものが祭りであり、祭の風景が現在の暮らしの中で、そこに暮らす人々や散歩をする人々の風景に影響を与えているのではないだろうか。

すなわち、祇園橋周辺の文化的景観とは、まちに暮らし、祭に参加する人々の普段の暮らしの中にある風景である。

## 5. 整備計画に関する考察

以上より、本研究では、祇園橋の「文化財保護」とは、祇園橋自体の保存に、祇園橋周辺の「文化的景観」の保護を含めたものではないかと考える。このことから、日常の視点場や、祭の視点場の中にある、まちと海、町山口川、祇園橋の関係を守ることが必要であると考えられる。

しかし、現在の整備計画では、まちと海、町山口川、祇園橋の関係については考えられておらず、流路が変更されることで、今まで町山口川の流れの中にあった祇園橋の持つ意味が失われてしまう(図-21)。

まず、本渡橋は祭においても、日常においても視点場となっているが、整備計画では、上流に水制工を設けるため、下流から見たときに、祇園橋の上流側はコンクリート構造物の風景となることから、祇園橋の水が流れる風景が失われてしまう(写真-9)( )。次に、上流右岸からの眺めが阻害されている。ここは、3つのお祭りの行列が通るのだが、祇園橋が見えなくては、祭の本来の意味が失われてしまう(写真-10)( )。さらに、河床の掘削を行う際には、干満の差によって変化する今の風景が失われないようにする必要がある。

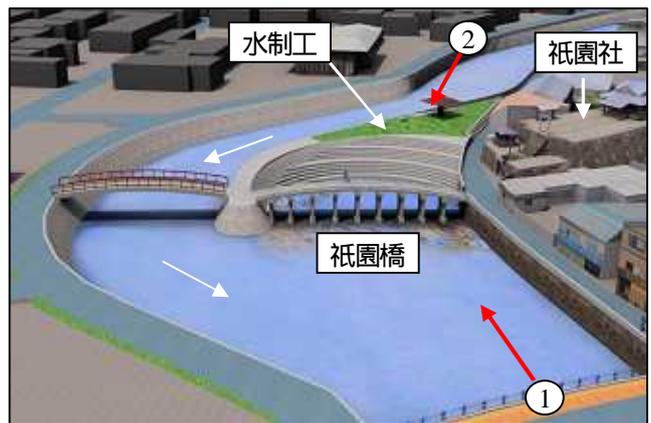


図-21 現在の整備計画(一部加筆・修正)<sup>52)</sup>



写真-9 本渡橋から見た祇園橋:



写真-10 上流右岸から見た祇園橋:

## 6. おわりに

本研究では、祇園橋周辺の文化的景観を明らかにし、河川整備に対して考察を行った。本研究により明らかにしたことを、以下に記す。

- ・ 現在の整備計画に対する課題を明らかとした。
- ・ 「空間の履歴」と「使われ方」の2つの視点に基づいて、それぞれの特徴を明らかとした。
- ・ 祇園橋の文化的景観とは、祭の風景だけでなく、そこに暮らし、祭に参加する人々の普段の暮らしの中にある風景であることを示した。

本研究は、現在の整備計画に対して、「文化的景観」の視点から、どのように整備を行っていくべきかという基本的な考えを示した段階である。今後は整備に対する考察をさらに行い、実際に整備が行われていく上で、必要とされることを、どのように設計に盛り込んでいくかという課題がある。そして、整備が完成し、そこに暮らす人々が、今までと変わりなく、祭を行い、普段の生活の中で、祇園橋周辺の風景を眺めることができ、初めて、文化的景観の保護ができたことになるのである。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、広く御指導、御鞭撻いただきました星野裕司准教授に深く感謝申し上げます。また、本研究において終始適切な御指導をいただいた小林一郎教授に心より御礼申し上げます。文化的景観ゼミなどを通して、様々な御助言を下さいました田中尚人准教授に心より感謝申し上げます。そして、本渡祇園橋と町山口川周辺の環境を守る会の鶴田八洲成氏には歴史調査、資料提供の面でご支援頂きましたことに心より御礼申し上げます。さらに、力不足の私を、ご自身の多忙な時間を割いてまで付き添い支えてくださいました遠山浩由さん、に心より御礼申し上げます。

最後に景観デザイン研究室の先輩方、同級生には、様々な面で御協力をいただきました。そして、私を大学に行かせて頂き、4年間応援して頂いた、家族に深く心から感謝の意を表し本研究の結びといたします。

平成 19 年 2 月 14 日

## 参考文献

- 1 文化庁 HP <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shurui/keikan.html>
- 2 本渡市史編さん委員会：本渡市史，p3,1991.12
- 3 本渡市都市計画図，1987.11
- 4 天草市HP <http://www.city.amakusa.kumamoto.jp/>
- 5 第1回 町山口川（祇園橋周辺）河川景観検討委員会 配布資料，2007.3
- 6 鶴田八洲成：国重文の祇園橋，pp153-154,1998.1
- 7 前掲5)，pp40-44
- 8 前掲4)
- 9 前掲4)
- 10 鶴田文史：図説 天草の歴史，p11
- 11 前掲1)，p412
- 12 前掲9)
- 13 前掲1)，p644
- 14 前掲1)，pp561-562
- 15 前掲1)，p1109
- 16 前掲1)，p1130
- 17 大日本帝国陸地測量部，五万分一地形図，1904
- 18 鶴田文史：天草の史跡文化遺産，pp78-79
- 19 前掲10)，pp 174-175
- 20 米田孤庵：天草郡地図，天草報知新聞社，1917
- 21 前掲1)，p1103
- 22 前掲17)
- 23 地理調査書，地形図1:50000,1948
- 24 祇園橋と本渡市の歴史、当時のまちのことを知る為に、祇園橋の側に住む郷土史研究者である鶴田文史氏にインタビューを行った。
- 25 本渡市誌編さん委員会：本渡市五十年誌，pp293-294，2005.3
- 26 国土地理院，地形図1:50000,1967
- 27 前掲10)，pp194-195
- 28 前掲3)
- 29 国土地理院，地形図1:25000,2000
- 30 前掲10)
- 31 前掲24)
- 32 前掲3)
- 33 前掲6),p187
- 34 前掲1),p1130
- 35 前掲1),p1131

- 36 第2回 町山口川(祇園橋周辺)河川景観検討委員会 配布資料, 2007.10
- 37 前掲24)
- 38 前掲3)
- 39 前掲3)
- 40 前掲36)
- 41 前掲3)
- 42 前掲3)
- 43 前掲36)
- 44 前掲3)
- 45 前掲3)
- 46 前掲3)
- 47 前掲6)pp1-4,18-22,42,46,64-65,88-89,109,144,188-195,213-218
- 48 前掲10)pp1,14-16,140-141,
- 49 前掲6),p215
- 50 前掲36)
- 51 前掲10),p140
- 52 前掲5)